

園外で自然体験活動を計画する際の留意点について

—サマーチャレンジの活動実践を通して—

小林 真・岩田郁代・米崎瑛美・稲垣恵美子・舟林美乃・高島浩美・神川瑞子・
中田良子・山村弘美・廣田仁美・島田みどり

園外で自然体験活動を計画する際の留意点について

—サマーチャレンジの活動実践を通して—

小林真¹⁾²⁾・岩田郁代²⁾・米崎瑛美²⁾・稲垣恵美子²⁾・舟林美乃²⁾・高島浩美²⁾・神川瑞子²⁾・
中田良子²⁾・山村弘美²⁾・廣田仁美²⁾・島田みどり³⁾

Consideration when planning outdoor activities in Kindergarten : A case study of Summer-Challenge activities

Makoto KOBAYASHI, Ikuyo IWATA, Emi YONEZAKI, Emiko INAGAKI,
Yoshino FUNABAYASHI, Hiromi TAKASHIMA, Mizuko KAMIKAWA,
Ryoko NAKADA, Hiromi YAMAMURA, Hitomi HIROTA and Midori SHIMADA

キーワード : 保育内容(環境) 自然体験 行事の計画

Keywords : contents of education in kindergarten(environment), outdoor activities , planning of events in kindergarten

問題と目的

幼稚園教育要領(文部科学省, 2008)では、保育内容(環境)の趣旨を「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」と設定している。さらにそのねらいとして次の3つを挙げている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
この中で(1)と(2)は、身近な自然とふれあい、興味や関心を持ち、発見を楽しんだり考えたりすることをねらっている。この2つのねらいを達成するために行う保育の内容は、次の5つであると考えられる。
- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

柴本(2006)は、幼稚園教育要領が制定されて以来、自然にかかわる保育内容では自然事象や動植物を観察する活動を中心とし、具体的に見たり体験したりすることを通じて、感覚的に自然をまずとらえるということに力点がおかれてきたと指摘している。すなわち「科学的な見方や考え方の芽生え」を培い、自然に対する「親しみや畏敬の念、生命を大切にす気持ち」などを養うためには、実際に自然と触れあうことが大切なのである。

それでは、自然と実際に触れあうことによって子供は何を感じたり学んだりするのであろうか。中坪・久原・中西・境・山本・林・松本・日切・落合(2011)は、小雨が降る日に森の中に出かけた幼児の遊びの様子と保育者の関わりを記録し、アフォーダンスの視点から子供の活動を分析した。この幼稚園では定期的に「森の日」を設けて、1日の大半を森の中で過ごすというカリキュラムを設定している。データの分析対象となった日は、小雨という野外の活動にとっては条件が悪いと思われる天候であった。しかし子供たちは木を揺らしたり木に登ったりするなど、いつもの日のように遊んでいた。これはいつもの木の葉っぱに雨粒がついているために、今までとは異なった環境になっていたためだと思われる。また、細い木の枝についた雨粒を保育者に向けて飛ばすなど、雨そのものが遊びを展開する上で重要な要素となっていた。さらに細い木の枝がしななって戻る動きそのものが、最初は興味を示さなかった子供に仲間との遊びを発生させる(affordする)働きを持っている様子が観察された。このように、保育者による統制が困難な森の中で、素朴

1) 富山大学人間発達科学部 2) 富山大学人間発達科学部附属幼稚園 3) 前・富山大学人間発達科学部附属幼稚園

な自然物の様子が子供の遊びを偶発的に展開させることがある。したがって、様々な自然環境を子供たちが実際に体験することは、感性を育むと同時に仲間との関係を深めるためにも役立っている。

それでは、幼稚園や保育所では実際にどの程度自然に親しむ活動を取り入れているのであろうか。井上・無藤(2007)は、東京都内と兵庫県内の幼稚園・保育所を対象に調査を行い、自然や動植物と触れあう体験、自然を題材にした絵本やお話などを保育活動の中でどの程度取り入れているかを検討した。その結果、東京都内の幼稚園・保育所の方が保育室内で行う自然に関する体験が少ないことが示された。同様に、自然のものを室外から持ち帰ってきて遊んだり、採ってきた小動物を飼育するなどの活動も東京都内の方が少なかった。また、自然のものを室外から持ち帰ってきて遊ぶことは、幼稚園の方が保育所よりも多く行っていた。しかし、園外の自然に囲まれたところで自然そのものと触れあって遊ぶ体験は、保育所の方が多くという結果が得られた。このように、立地条件や保育施設の種別、設置主体によって自然と触れあう活動が異なっていることが明らかになった。

保育施設の立地条件によって、自然とのふれあいがどの程度容易であるかは異なってくる。逆に言えば、自然と触れあうことが比較的容易に実践できる幼稚園・保育所では、地の利を生かして積極的に園外における自然体験を保育に取り入れ、地域に根ざした教育計画を立案・実施していくべきであろう。

しかし岡本(2010)が報告した秋田県内で行われている「森の保育園」活動では、雪の日に森の保育園に参加することを、「手とか足とかすごく冷たくなる」からキライだと表現した幼児もいた。このように、様々な季節・天候の中で自然に十分に触れあって欲しいという意

図で自然体験活動を企画したとしても、全ての子供がそれを楽しみ・嬉しいと感じているわけではない。特に園外における自然体験に対して、不安や嫌悪感を抱いている子供がいることを念頭に置く必要がある。そして、こうした子供たちが安心感を十分に感じ、自然体験活動に期待感がもてるように、事前の準備を丁寧に行う必要がある。しかし単なる安全管理という視点からではなく、子供たちの感情(期待感や不安)に配慮した事前の準備のあり方について言及した研究は見当たらない。

そこで本研究では、富山大学人間発達科学部附属幼稚園の年長児を対象とした「サマーチャレンジ」活動の実践を通して、園外保育において自然体験活動を実施する際に、どのような準備が必要なのかを検討する。本研究で取り上げる「サマーチャレンジ」とは、夏休みの初日に年長児が独立行政法人青少年教育振興機構が運営する国立立山青少年自然の家(以下、自然の家と略記)において、野外の自然体験活動を行う園行事である。本研究の研究仮説は、これまでは実施していなかった教師に対する事前の園内研修と、子供に対する事前の体験学習を導入することが、子供たちの期待感を高め、不安感を軽減する効果を示すというものである。その効果を、当日の子供たちの参加の様子と、事後の教師に対するアンケートから検討する。

実践の経過

富山大学人間発達科学部附属幼稚園におけるサマーチャレンジ活動の準備に関する資料、および実践当日の子供と保育者の行動観察、及び事後に記述してもらった感想・意見を分析対象とした。Table1にサマーチャレンジ実践の全体計画を示す。

Table 1 サマーチャレンジ実践の全体計画

時 期	実施内容	
5月上旬	園内研修	保育と自然体験についての講義(※1) ・自然体験の意義 ・子供にとっての環境の見え方(アフォーダンス) ・自然体験が苦手な子どもへの配慮
5月中旬	素案づくり	各自が現地でできる遊び(案)を立案
6月中旬	計画立案	実施計画(案)についての打ち合わせ ・ねらいの明確化 ・活動の選定(沢登り・トントンの森の散策)
7月上旬	現地地下見 事前学習	幼児に対する事前学習 ・現地の写真を見て活動のイメージをもつ ・園内の小川に入って濡れる感触を体験する
7月中旬	当日(※2)	
8月下旬	事後アンケート	今回の計画についての感想と今後の改善点

(※1) 園内研修で使用した資料については Figure 1 を参照

(※2) 活動の実際は本文中の写真(Figure 2~18)を参照

1. 活動にむけた準備

(1) **事前の園内研修** 5月上旬に、まず第1著者(園長)が講師となって園内研修を行った。その際に使用した資料をFigure 1に示す。

まず、自然体験活動の意義について確認をした。^{注1)} 具体的には、感性を育むこと・身体の制御力を高めること・達成感を味わうこと・社会性を育むことの4つである。次に、子供一人一人の個性の把握についての講義を行った。特に、子供によって環境の見え方が異なることを、自然の家における沢登りや様々な野外活動の写真を提示しながらアフォードンスの考え方に基づいて解説した。^{注2)}

次に、野外での活動にスムーズに参加できないことが想定される子供の理解と対応についての共通理解を図った。特に、新しい環境や新しい活動になかなかなじめない子供には、活動の見通しをもたせ、事前に安心感を感じることが大切であることを強調した。こうした子供理解を踏まえて、活動のねらいを明確にし、事前学習を十分に積むことの大切さを伝えた。この事前研修の終了時に、現地でどのような活動(遊び)を企画すればよいか、教員がそれぞれの素案を考える課題を与えた。

(2) **素案づくりと計画の立案** 事前研修の際に与えられた課題について、それぞれの教員が立山青少年自然の家で可能な体験活動の素案を作成した。その資料を年長児の担任団で協議し、具体的なサマーチャレンジの活動計画案を立案した。それぞれの教員から寄せられた回答をTable 2に示す。

昨年までの経験を踏まえて、サマーチャレンジの中心活動は前谷の沢登りとし、沢登りに十分時間をかけて自然に触れる体験を保証することとした。そのほかに自然散策路(トントンの森)の一部を散策し、森の自然にも触れることとした。

今回のサマーチャレンジのねらいは「立山の大自然に触れ、仲間と助け合い、励まし合って活動することを楽しむ」とした。また、サマーチャレンジで行う内容は①友達や保育者と一緒に自然の中を歩く、②バスや公共の施設を利用するときのマナーを守る、の2点とした。

(3) 現地の下見・事前学習

① **下見**：前年度に、サマーチャレンジの活動の際に自然の家の指導員にリーダーとして参加してもらい、沢の中で水や自然と触れあう体験が十分に保証されたことから、今年度も自然の家の指導員に加わってもらうこととした。下見の際に、前谷の沢の中で遊べるポイントや、溪流で魚が隠れているポイントなどについての説明を受け、事前学習に用いる写真を撮影した。^{注3)}

② **事前学習**：下見の際に撮影してきた写真を用いて、サマーチャレンジではどのようなところに出かけるのか、そこでどのような遊びで楽しむことができるのかについて説明した。また、水に濡れたり汚れたりすることに対して抵抗があるためにスムーズに活動に参加しにくい子

供がいることを踏まえ、園内の築山に登った後にそこから流れる小川に靴のまま入って、水に濡れる感触を事前に体験した。また、子供たちは2学級の混成で4つのグループに分かれており、当日は全て班ごとに行動することになっているので、グループのメンバーで協力し合っしてほしい旨の説明も行った。

(4) **安全管理・健康への配慮等** 体調不良が心配される幼児については、保護者と十分に連携を取り、必要に応じて経口補水液を補給できる準備を整え、活動中には養護教諭によるバイタルサインの計測を行い、体調の管理に努めることとした。また、濡れたり汚れたりすることに心理的な抵抗がある子供については、1) 当日参加するか、2) 参加した場合に沢登りを行うか、3) 参加した場合に森の散策を行うか、について本人の意思を尊重することを保護者との間で確認した。沢登りや森の散策に参加しないことを選択した場合には、教師が付き添って、本人が楽しめるような自然散策を行う用意をした。

2. 当日の活動

大学のバスで附属学園前から自然の家に向かい、入所式を行った後、沢登りの準備に取りかかった。沢登り終了後は室内で昼食を摂り、エプロンシアターなどを見ながら身体を休めた。午後はトントンの森の散策の他に、今年度新しく少年自然の家に設置された幼児用の遊歩道を歩き、宿泊棟の前の用水路でオタマジャクシやアメンボなどに触れあった後、退所式を行って帰宅した。沢登りに対して不安を抱く子どももいたが、全ての子供が全行程に参加することができ、体調面での問題もなかった。以下に、沢登り・自然散策・遊歩道・用水路の散策の様子を述べる(Figure 2~18を参照)。

(1) **沢登り** 初めに入所式の際に、自然の家の指導員から立山の自然についての写真を見ながら季節の移り変わりについての話を聞いた。その後で、服装を整えて沢登りに出発した。

沢に入ったときに、リーダー(自然の家の指導員)がまず水の中で10回ジャンプしようという提案を行い、子供たちははしゃぎながらジャンプしていた。このような導入によって、靴が水に濡れることをあまり不快に思わずにすんだものと考えられる。少し沢を登って水がたまっているところに着くと、今度はおしりを水につけようという提案があった。全ての子供たちは溪流の中に座り込んで濡れることを楽しんでた。

子供たちは、途中で川をせき止めて滝のようになっている場所で斜面を滑る遊びを楽しんだり、きれいな石を見つけたり、柔らかく落書きのできる石を見つけて岩に絵を描いたりして溪流を楽しんでいた。また、葉っぱを川に流して遊ぶ様子も観察された。しかし、植物や虫などをじっくり観察する様子はほとんど見られなかった。

(2) **自然散策** 昼食後のトントンの森の散策では、リーダーの後について散策路をそのまま進むだけになってし



Figure 1 園内研修で提示したスライド

Table 2 保育者から提出された遊びの案とサマーチャレンジのねらい

遊びの案

<自然に学ぶ／感性を育む>

- ・ 沢登り（冷たい水、ひんやりとした空気等を感じる）
- ・ 沢登り（岩を滑る、深い水に飛び込む etc.）
- ・ 山野草を見つける
- ・ 同じ葉っぱを集めよう 見本の葉っぱと同じものを探してくる
- ・ 宝探し 視覚・触覚を使って探そう／嗅覚・聴覚を使って探そう
- ・ 沢やトントンの森の中にあるものを見つけて、見立て遊びをする
- ・ 目を閉じて様々な音を探す
- ・ 岩や落ち葉の上に座ったり寝転んだりして感触を味わう
- ・ 虫になってみよう ルーペで石や葉っぱを拡大して見る

<身体の敏捷性や巧緻性（コントロール）>

- ・ 沢登りを通じて、身体をコントロールしながら山道を上り下りする
- ・ 沢登りの途中で枝にぶら下がるようなチャレンジ課題を与える
- ・ 木登り（トントンの森で木に登る、木の根や枝を乗り越えたりくぐったりする）
- ・ 山道歩き
- ・ 地面に書いてケンパ 地面に○を書いてケンケンバ遊びをする
- ・ 鬼ごっこ ゲレンデや林の中などで鬼ごっこをする

<達成感（自己肯定感）を味わう>

- ・ 沢登り（登り切る、歩きにくいところや困難にもめげずに頑張る姿に声をかける）
- ・ 沢登り（ゴールが見えないため、自分の位置がわかるような地図・ポイントを用意する）
- ・ 葉や小枝、松ぼっくり等を組み合わせての工作
- ・ 宝探し 課題にあったもの（ハートの形の葉、よいにおいの枝 etc.）を探す

<社会性を育む（仲間との協力）>

- ・ どの活動でも、グループを意識させる（友だちのペースに合わせることを意識する、みんなで乗り越えられるような課題を与える、みんなで制作をするなど）
- ・ 沢歩き（グループみんなで力を合わせて岩に登ったり、沢を渡ったりする）
- ・ ゲーム遊び（事前学習を含む）
- ・ グループ対抗の石積み
- ・ 宝探し グループの色を探す（ネイチャーゲームのようにあえて人工物を隠しておく）
- ・ 役割分担をする

サマーチャレンジのねらい

- ・ 自然に親しむ／全身で自然を感じる
- ・ 自然の中で身体を思い切り動かす
- ・ のびのびと自分の思いを表現する
- ・ 友だちと一緒にすることの楽しさを満喫する
- ・ やってみたい目標に向かって友だちと力を合わせる
- ・ 仲間と助け合い、励まし合って活動することを楽しむ

まった。一部には植物を探索する子どももいたが、途中の自然をゆっくり味わう時間が取れなかった。例えば「スギのもり」では、上空を見上げるとスギの枝による独特の造形が見えるが、こうした風景を味わったり虫を探したりする時間はなかった。

(3) 遊歩道の散策 幼児用の遊歩道は、木を伐採して今年度新たに設置したもので、伐採されたばかりの斜面の上に木道が敷かれている。ここでは、自然に親しむというよりも少し高い木道をバランスを取りながら歩く活動が中心となっており、斜面の植栽もまだ生えそろうていないため、自然体験活動としては十分ではなかった。

(4) 用水路の探索 自然の家の宿泊棟の前を流れている用水で、オタマジャクシやアメンボなどの水棲動物・昆虫を観察したり、周囲の植生を眺めたりした。しかし、後から到着したグループにとっては、探索の時間が十分

に取れなかったようである。



Figure 2 入所式：立山の自然に関する事前学習



Figure 3 グループごとに沢に出発(ビデオより)



Figure 4 いよいよ水の中へ



Figure 5 溪流に入って楽しむ子供たち



Figure 6 斜面を滑り降りる遊び



Figure 7 木の枝を登ったりくぐったりする子供たち



Figure 8 きれいな石を見つけた子供



Figure 9 落書きできる石を見つけた！



Figure 10 葉っぱを流して遊ぶ子供たち (ビデオより)



Figure 11 トントンの森の入り口



Figure 13 植物を探索する子供



Figure 12 トントンの森を下っていく



Figure 15 杉の森の中で見上げた空



Figure 14 杉の森で一休み



Figure 16 幼児用の遊歩道



Figure 17 遊歩道の全景



Figure 18 オタマジャクシのいる水辺

3. 事後アンケート

保育者に記入してもらった事後アンケートの概要をTable 3に示す。

幼稚園の教員は総じて、園内研修によってサマーチャレンジの意義を改めて考えたり、幼児理解が深まったり、事前学習の必要性を改めて考えたりしたと回答していた。それを踏まえて下見と事前学習を行ったことが、子供に期待感をもたせたり、不安を軽減したりする効果があったと考えている。また、事前学習から当日までの一連の流れの中でサマーチャレンジをとらえるという体験ができたことで、子供の学びが深まったと感じている保育者もいた。

次年度に改善すべき点は、集約すると①事前学習をより現実感のある体験にする、②保育者が自然についての予備知識を持っておく、③役割分担や協力ができる活動を考える、④当日のうちに振り返りを行う、⑤新設された幼児用の遊歩道を活用する予定を立てる、という5つの内容が挙げられた。

考察

1. 本研究から明らかになったこと

今回の実践では、事前学習を十分に行ってから園外での自然体験活動を行うことをねらった。そのためにまず園内研修を行い、自然体験活動の意義・子供の理解・事前学習の必要性についての共通理解を図った。当日は全ての子供が沢登り・トントンの森の散策に参加し、自然を楽しむことができたことから、事前の準備が有効であったと考えられる。また教師を対象とした事後のアンケート調査でも、園内研修と事前学習が有効であったとの回答が多く寄せられた。これらの結果から、活動のねらいと準備のあり方について職員が共通理解を図り、子供の状態に合わせて事前学習を行うことの有効性が実証されたといえる。

特に、これまでは行っていなかった築山と小川での遊びを導入したことで、子供の期待感が高まったり、不安感や嫌悪感が低まったりする効果があったと思われる。実際に、日頃から不安が高い様子が観察される子供も、当日は沢登りとトントンの森の散策に参加することができた。写真による説明だけでなく、実体験を伴う事前学

Table 3 事後アンケートの内容

- ・子どもたちが活動のイメージや見通しをもつことに、大変有効であった
 - ・環境が語りかけてくるポイントがわかりやすく、くぐる・またぐ・のぼるといったトライを子供たちと楽しむ上で有効だった
 - ・写真を見ることで、視覚から「こんな所へ行くんだ」と子どもたちの意識が高まったと思う
 - ・当日の子供の発言で「〇〇いるかなぁ」等と具体的な楽しみをもっていることがうかがえたので、役だったと思う
 - ・「築山と小川での遊びを」サマーチャレンジを想定して行ったのは今回が初めて(?)ではないかと思うが、イメージを膨らませ、期待感をもつのに効果があったのではないか
 - ・汚れること、濡れることに抵抗が強い子どもにも、頑張る気持ちを持たせることができたかもしれない
 - ・具体的な物を見たり水に濡れて歩いたりする学習で、子どもたちの意欲も増し、サマーチャレンジが1日だけの体験ではなく、時間をかけたものになってよかった
 - ・足を濡らすのがいやな子供も、濡らすことが嬉しくて「キャーキャー」と言っている様子を見て、「足を濡らすのはいやなことではない。おもしろいこと。友達は喜んでいる。」ということに気付き、当日「やってみよう」という気持ちになった子供もいると思う
 - ・(築山と小川の遊びは、現地と)規模は違うが、ある程度見通しにつながったり、自信につながったりしたのではないか
 - ・未経験のことに不安を感じる子供の多いクラスなので、それが軽減されたと思う
 - ・(下見に生き物に詳しい指導員がついていてくれたことで)植物だけでなく、生き物の生息地を知ることができ、子どもたちに伝えられたことで期待感をより高めることができた
- <来年度以降に改善した方がよい点>
- ・幼児用の遊歩道は子どもたちが喜んでいて、いい経験になったので、予定に入れておく といい
 - ・下見の際についてくれた指導員と当日の指導員が別の職員であったため、急な変更は必ず事前に共通理解する必要がある
 - ・築山と小川での事前学習の際に、流れる水の量を増やしたり、ホースで上から水を流すなど、ある程度の水量が欲しい
 - ・できれば子どもたちがより主体的にリーダー、副リーダーの仕事ができるような体験内容にしてはどうか
 - ・今年の活動、トントンの森、用水(おたまじゃくしとの出会い)の写真を来年度の事前学習用に準備しておく
 - ・楽しかったことや頑張ったことなどの振り返りをその日のうちにしてから帰るとよいのではないか(退所式の前にグループごとの時間を取るなど)
 - ・子供の感想を知りたい
 - ・森や沢についてちょっとした知識を多く持って、子どもたちといろいろ話しながら回れるように、職員の学びも必要
 - ・今年の計画も時間に余裕がとってあり、沢で木にまたがったり滑り台をしたりつるや大きな葉で遊んだりする時間が合ったので、来年度もその点に留意するとよい
 - ・日程に、時間的な余裕が必要

習を導入したことがより効果的だったと思われる。なお、今回の事前学習は写真を用いていたが、今年度の沢登りの様子を撮影した動画のデータがあるので、次年度以降は動画を利用したより臨場感のある事前学習も可能になるとと思われる。

なお、今回の実践では全ての幼児が活動に参加することができたため、どの活動に参加するかを子供に確認する必要はなかったが、もし感覚的な過敏さのある子供が在籍している場合には、本研究で準備しておいたような柔軟な対応をする必要がある。アメリカ精神医学会(2013:日本版は2014)が作成したDSM・5では、自閉スペクトラム症のこだわりの症状の1つとして感覚的な過敏さが挙げられている。従来から、広汎性発達障害児に感覚的な過敏さがあることは指摘されていた(たとえば尾崎・小林・水内・阿部,2013)。しかし診断基準が大幅に改定されたDSM・5では、感覚的な過敏さ(または鈍さ)がこだわりの症状として明確に定義されるこ

とになった。そして、感覚の過敏さは短期間では改善することができない本質的な特徴である。その場合には、少くも無理をさせても濡れたり汚れたりする体験をさせようとするのは明らかに誤りである。本研究では、経過の部分で述べたように、当日の参加のしかたについて子供の意思を尊重して別の活動を行う準備をしてあった。こうした柔軟な対応をあらかじめ計画しておくことは合理的配慮だと考えられる。

2. 今後の課題

藤原(2010)は、ある幼稚園における自然を題材とした4つの保育事例を分析し、教師の意図にはa. 感性を育む、b. イメージを持って遊べるようにする、c. 表現へつなげる、d. 遊びを広げ、深める、の4つが含まれていると述べている。今回のサマーチャレンジでは、自然と十分に触れあうこと、すなわち感性を育むことが主な目的であった。したがって今後は、活動の計画だけ

でなく、活動の最中に教師がどのような言葉をかけたり、自然の事物に子供たちの関心を誘導していたのか、といった保育者の関わりを記録し、よりよい体験活動のあり方を検討していく必要がある。

また、事後のアンケートにもあったように、その日のうちに振り返り活動を行い、子供たちの感想を確かめることも、計画立案の効果を検討するためには必要であろう。特にサマーチャレンジの活動は、終業式が終わった翌日（夏休みの初日）に行う園行事であるため、通常の保育の中で振り返りを行うことができない。したがって、その日のうちに振り返りを行い、子供たちと教師と一緒に自然体験の喜び・達成感を共有する場を設定することは、教育的な効果を高めるために有用であろう。

長期的な検討課題としては、自然体験活動を複数回実施できるような年間計画の立案も考えられる。今回の実践では、入所式後のオリエンテーション（Figure 2）で、降雪時の写真を見て子供たちが驚いていた。したがって、同じ場所を異なった季節（特に冬）に訪れ、季節の変化を十分に感じたり、平地ではなかなかできない雪遊びを十分に楽しんだりする機会を持つことも必要だと思われる。今後は、園行事のあり方を見直す中で、ウィンターチャレンジのような取り組みを検討する価値もあると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association 2013 Statistical and Diagnostic Manual(5th.ed)（日本精神・神経学会監修 監訳：高橋三郎・大野裕 DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引，医学書院，2014）
- 藤原照美 2006「自然」とのつながりに関する研究－5歳児の保育の実践分析から－ 幼年児童教育研究，22, 77-92.
- 井上美智子・無藤隆 2007 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 大阪大谷短期大学教育福祉研究，1-9.
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領.
- 中坪史典・久原有貴・中西さやか・境愛一郎・山本隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり 2011 アフォーダグスの視点から探る「森の幼稚園」カリキュラム－素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか－ 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，

39, 135-140.

- 岡本理子 2010 幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察－秋田・森の保育園の事例から－ 桜美林論考，39-48.
- 尾崎康子・小林真・水内豊和・阿部美穂子 2013 保育者による幼児用発達障害チェックリスト（CHEDY）の有用性に関する検討 特殊教育学研究，51, 335-345.
- 佐々木正人 2013 アフォーダグス入門－知性はどこに生まれるか－ 講談社学術文庫.
- 柴木枝美 2006 幼稚園の教育課程の変遷に関する一考察－自然にかかわる保育内容に焦点をあてて－ 教育方法の探究，9, 1-8.

注記

- 注1）本研修で使用した自然体験活動の意義に関する資料は、平成22年に自然の家で行われた幼年期における自然体験活動指導者養成講習会において、信州大学教育学部教授平野吉直氏が配布した資料に第1著者がコメントを加えたものである。第1著者はこの事業の講師を務めており、その際に学生と行った野外体験をもとに園内研修用の資料を作成した。
- 注2）アフォーダグスとはギブソンが提唱した概念で、物の知覚のしかたは環境に埋め込まれているという考え方である（佐々木，2013）。
- 注3）第1著者は、本務の関係で下見には同行しなかった。しかし、自然の家の運営委員を務めるほか、この施設の利用経験が数十回に上っている。そこで幼稚園教諭が下見の際に撮影してきた写真と現地についての報告を聞き、事前学習で子供たちに伝える内容についての打ち合わせを行った。

付記

富山大学人間発達科学部附属幼稚園では、研究成果を発表する際に写真を使用することについて、保護者の同意を得ている。

(2016年8月31日受付)

(2016年10月5日受理)